

〔2〕生活単元学習による実践

(1) 取り組みについて

生活単元学習は、生徒が目的意識を持ち、具体的な活動を通して意欲的に取り組むことのできる指導形態である。コミュニケーションの視点で捉えると、友だちや先生との様々な集団での活動を通して、自分の思いや考えを表出させ、人と関わる楽しさを味わわせることのできる学習である。

① 昨年度までの実践

この研究の初年度は、研究の構想を立案する中で、特にコミュニケーションに視点をあてた研究単元として、どの単元がふさわしいか、検討していった。その中で、次の4つの単元があげられた。

単元	実践の概要	主な関わりの集団と活動内容（校外の人との関わり）				
6月 野外炊飯	何もない松林の中で野外炊飯をするために、各学年でメニューを決め、炊飯練習や道具作りをして当日を迎えた。 当日は、あいにくの雨となったが、体育館や調理室を利用し、練習の成果を発揮し楽しんだ。	<p>〈3年〉・招待炊飯 ・炊飯練習 ・テーブル、ベンチ、コップ、はし、エプロン作り</p> <p>〈2年〉・招待炊飯 ・炊飯練習 ・まき、テーブル、いす、台ふきん、パンダナ作り</p> <p>〈1年〉・野外炊飯をする松林に行ってみる。 ・炊飯練習 ・まき、いす、テーブルクロス作り</p> <p style="text-align: right;">(K公民館の人)</p>				
10月 大山林間学校	この年から、日帰りで行っていた大山への校外学習を泊を伴う林間学校とした。その結果、研修所への宿泊、夕べのつどい、外食等の経験が可能となり、学習内容が大きくふくらんだ。学級と班の学習を両方取り入れた。	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 25%;">〈赤組〉 ・日程表 ・出し物 練習 ・校外学習</td> <td style="width: 25%;">〈黄組〉 同左</td> <td style="width: 25%;">〈緑組〉 同左</td> <td style="width: 25%;"> <p>〈3年〉・鳥取県の地理 ・買い物 ・挨拶</p> <p>〈2年〉 同上</p> <p>〈1年〉 同上</p> </td> </tr> </table> <p style="text-align: right;">(見学先、お店、観光客、研修所の人)</p>	〈赤組〉 ・日程表 ・出し物 練習 ・校外学習	〈黄組〉 同左	〈緑組〉 同左	<p>〈3年〉・鳥取県の地理 ・買い物 ・挨拶</p> <p>〈2年〉 同上</p> <p>〈1年〉 同上</p>
〈赤組〉 ・日程表 ・出し物 練習 ・校外学習	〈黄組〉 同左	〈緑組〉 同左	<p>〈3年〉・鳥取県の地理 ・買い物 ・挨拶</p> <p>〈2年〉 同上</p> <p>〈1年〉 同上</p>			
11月 学習発表会	「ピーターパン」の劇に取り組み、それぞれの役になりきって声をしっかり出して演技する練習を重ねた。練習の度に100点満点での点数をつけたり、一人ずつのめあてを示したりして意欲づけをはかった。	<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 33%;">〈パート1〉 ・劇のパート練習 ・大道具作り ・小道具作り</td> <td style="width: 33%;">〈パート2〉 同左</td> <td style="width: 33%;">〈パート3〉 同左</td> </tr> </table> <p style="text-align: right;">(学習発表会に来られる人)</p>	〈パート1〉 ・劇のパート練習 ・大道具作り ・小道具作り	〈パート2〉 同左	〈パート3〉 同左	
〈パート1〉 ・劇のパート練習 ・大道具作り ・小道具作り	〈パート2〉 同左	〈パート3〉 同左				
3月 バザーをしよう	各学年が、それぞれ工夫をこらして制作した作品を家の人や親しい先生に買ってもらうと計画し、準備を進めた。 たくさんのポスターや案内状をかき、当日は、たくさんの人を買ってもらった。	<p>〈3年〉・バザー製品作り (小鉢) ・接客の仕方、言葉遣い ・案内状、お礼状、ポスター</p> <p>〈2年〉・バザー製品作り (カレンダー) 同上</p> <p>〈1年〉・バザー製品作り (手すき絵はがき) 同上</p> <p style="text-align: right;">(家の人、本校の先生)</p>				

「大山林間学校」で、学級を解いた縦割りグループでの活動を取り入れたことは、新しい友だちとの関わりが生まれ効果的であった。次年度は、この班活動を7月の「ミニキャンプ」から取り入れ積み上げてはと見え、次のような展開をした。

単元	実践の概要	主な関わりの集団と活動内容（校外の人との関わり）			
5月 野外炊飯	各学年なりの経験やイメージを生かして、必要な準備・練習を話し合いにより決め、活動した。当日は、その成果を発揮し、各学年で協力して野外炊飯を楽しく会食した。	〈3年〉・炊飯練習 ・まき、かまど、はちまき作り ・テーブル、いすの修理			
		〈2年〉・炊飯練習 ・まき、まな板、コップ、なべしき作り ・いすの修理			
		〈1年〉・炊飯練習 ・まき、テーブル、なべつかみ、竹の食器作り			
(K公民館の人)					
7月 ミニキャンプ	新しく研究単元に加え、大山林間学校の単元まで活動を共にさせ、班の仲間意識を育てようと考えた。テント張りや炊飯で協力して活動した。当日は雨となり、体育館でのテントにかわる基地作りを各班で工夫した。	〈赤班〉 ・炊飯練習 ・テント張り ・出し物練習 ・買い物	〈黄班〉 同左	〈緑班〉 同左	
10月 大山林間学校	昨年度より、班活動の時間を増やし、班の特徴を生かした展開や生徒同士の関わりが見られた。「ミニキャンプ」の単元と同じ班での活動としたため、学習にスムーズに入れ、友だちとの関わりも深めることができた。	〈赤班〉 ・地図 ・買い物 ・スケッチ ・出し物練習 ・校外学習	〈黄班〉 ・大山の様子や民話 ・石地藏、前かけ作り ・出し物練習 ・校外学習	〈緑班〉 ・地図 ・時刻表 ・買い物 ・出し物練習 ・校外学習	(見学先、お店、観光客、研修所の人)
11月 学習発表会	「大山林間学校」の思い出や、大山の民話を取り入れた劇「大山物語」の発表をした。自分たちの経験や、学習してきたことの発表なので、生徒たちにわかりやすく、実感をこめて演技することができた。	〈パート1〉 ・劇のパート作り ・大道具作り ・小道具作り	〈パート2〉 同左	〈パート3〉 同左	(学習会に来られる人)
2月 お客様を迎えよう	昨年度のパザーを発展させ、パザーともてなしでお客様を迎えた。	〈3年〉・パザー製品作り ・もてなし (カレンダー) (お好み焼き)			
		〈2年〉・パザー製品作り ・もてなし (手すき絵はがき) (ぶた汁)			
		〈1年〉・パザー製品作り ・もてなし (コーヒーカップ) (コーヒー、ケーキ)			
(研究発表会に来られる人)					



さあ、お客様を迎えよう！

実践した結果、班活動は充実したものとなったが、1学期はまだ学級づくりに力を注ぐべきではないか、という反省が出た。また、「野外炊飯」と「ミニキャンプ」を合わせて「キャンプ」とすること、「校外学習」や「修学旅行」を、各学年独自の計画に従って行うこと等について検討がなされた。

② 本年度の実践

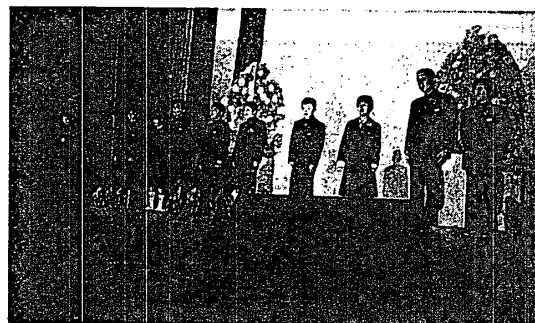
1～2年次の取り組みと反省を受けて、本年度は、コミュニケーションに視点をあてた単元を次のように展開した。

単 元	実 践 の 概 要	主な関わりの集団と活動内容（校外の人との関わり）		
6月 キャンプ	昨年度までの、「野外炊飯」と「ミニキャンプ」を合わせた単元で、各学年が学級づくりをしながら、話し合いを大切にしていって取り組んでいった。当日も、テント張りや野外炊飯に活動をしぼり、じっくり取り組んだ。	〈3年〉・計画の話し合い ・炊飯練習 ・テント張り ・かまど作り ・まき作り ・マット作り		
		〈2年〉・計画の話し合い ・炊飯練習 ・テント張り ・まき作り ・出し物練習		
		〈1年〉・計画の話し合い ・炊飯練習 ・出し物練習 ・テント張り ・食器作り ・まき作り		
				(K公民館の人)
7月 校外学習 (修学旅行)	今年度初めて、学年毎に場所や日程等を計画し、それぞれ独自の活動を展開した。昨年度に比べ、3年生は「修学旅行」の学習に集中でき、1・2年生はそれぞれの学年の思いの生かせる場所を選んで学習できた。	〈3年〉(修学旅行～広島～) ・計画の話し合い ・見学先 ・あいさつとお土産 ・平和と戦争		
		〈2年〉(校外学習～福部村～) ・計画の話し合い ・切符の買い方 ・地図作り ・梅の実の収穫		
		〈1年〉(校外学習～佐治村～) ・計画の話し合い ・日程表作り ・紙すき ・昼食代、バス代		
				(見学先で出会う人)
10月 大山宿泊学習	昨年度より、さらに当日の班活動の時間を増やし、大山寺周辺の行動は、すべて班の計画に任せられることになった。そこで、班毎に、したい活動内容、コース等を話し合い、当日はその計画にそって行動した。	〈赤班〉 ・計画の話し合い ・地図 ・日程表 ・出し物練習	〈黄班〉 ・計画の話し合い ・地図 ・日程表 ・あいさつとお土産	〈緑班〉 ・計画の話し合い ・日程表 ・出し物練習 ・地図
				(見学先、お店、観光客、登山者、研修所の人)
11月 学習発表会	4月から活動してきたことや歌で構成した「ぼくたちの季節」を練習し、発表した。 一人ひとりが、持ち味を生かし、得意な歌や演奏や台詞を、舞台の上で力いっぱい発表することができた。	〈パート1〉 ・歌と呼びかけの練習 ・大道具作り ・小道具作り	〈パート2〉 同左	〈パート3〉 同左
				(学習発表会に来られる人)

これらの実践は、さらに2月の「お客様を迎えよう」の単元へとつないでいきたい。

今年度は、今までの反省が生かされ、学級と班の学習が適度に組み合わせられた。また、どの単元でも、題材を精選し、生徒に話し合い活動を十分にさせながら進めるよう努めた。

次に、今年度実践した「キャンプ」「校外学習（修学旅行）」「大山宿泊学習」について詳しく述べたい。



大きな声ではっきりと（学習発表会）

(2) 「キャンプ」「校外学習（修学旅行）」における実践

① 取り組みの構想

「キャンプ」

昨年度までの「野外炊飯」と「ミニキャンプ」の単元を合わせて、今年度は「キャンプ」とし、1か月以上かけてじっくり取り組むこととした。何もない松林の中で、友だちと一緒に知恵を出し合い工夫をしながら野外炊飯をし、テントを張って寝るということは、中学部の生徒にとって魅力的なことである。何もわからないところから出発する1年生から、2年間の経験を生かして取り組む3年生まで実態は様々であるが、各学年が下の表に示すようなコミュニケーションに視点をあてた活動内容を選び、じっくり学習を積み上げようと考えた。

集 団	1 年	2 年	3 年
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン を 意 識 し た 主 な 活 動 内 容	◎学習計画の話し合い ・昨年度の写真を手がかりに、必要なことを考える。	◎話し合い (1)めあて、係分担など (2)メニュー、日程 (3)出し物	◎計画会 (1)キャンプの目標 (2)準備や練習の内容とその日程について
	◎炊飯練習 ・話し合った分担に従いながら、見通しをもって活動する。	◎テント張り ・示範を見て、昨年度の様子を思い出す。 ・声を掛け合い、協力する。 ・分からない時は聞く。	◎かまど作り ・よく燃えるかまどの工夫 ・協力して作る ・オイル缶をもらいにガソリンスタンドへ（お礼状を出す。）
	◎テント張り ・励まし合いながら、分担を果たす。	◎まき作り ・昨年の様子を思い出し、自分たちでまきを切ったり、分量を決めたりする。 ・道具の使い方。	◎まき作り ・協力してまきを作り必要な分量を決める。 ・グループで分担
	◎食器作り ・相手の友だちと協力しながら、竹のコップ、はし作りをする。	◎野外炊飯 ・当日の見通し（作業の流れ、段取りを知る。） ・自分の係、仕事に責任を持つ。	◎野外炊飯 ・自分の仕事に責任を持ち、後始末はみんなでする。
	◎出し物練習 ・自分なりに考えを出す。 ・様々な意見を先生の援助でまとめる。	◎出し物練習 ・朝の会の発展 ・問題や答えを自分なりに考えて、絵に描く。 ・分かってもらえるだろうかという不安と期待	◎マット作り ・話し合いの中からシートが必要なことに気づかせる。
	◎キャンプ当日 ・計画に従って、学級でまとまってなかよく活動する。		◎テント張り ・示範を見て昨年度の様子を思い出す。 ・自分たちだけで張る。分からない時は聞く。 ・グループで協力して張る。
	◎したことを思い出して発表する。		

「校外学習（修学旅行）」

生徒たちは、キャンプをやりとげたことで自信を得ると同時に学級の仲間意識を強く持ち始めた。そこで、この「校外学習（修学旅行）」の単元は、学級独自の活動として、場所・日程・活動内容等生徒の思いや実態を大切にしながら下の表のように組み立てていった。この学習では、学級の特徴を生かした話し合いや活動を進めることができ、仲間意識がさらに育つであろうと期待した。そして、最後に各学年が資料や作文、新聞などをもとに報告会を持ち、お互いのことを知り合うコミュニケーションの場とすることにした。1・2年生はこの鳥取県東部への校外学習が秋の大山宿泊学習へと、3年生は1・2年生で経験してきた県内での校外学習が県外の修学旅行へと発展し、経験の拡大が図られる。

集 団	1 年	2 年	3 年
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン を 意 識 し た 主 な 活 動 内 容	◎学習計画の話し合い ・パンフレットや写真を手がかりに、見学場所や内容を決める。 ・持ち物について～持って行く訳を考える。	◎話し合い (1)日程 (2)集合場所 (3)活動内容・コース	◎修学旅行への興味・関心 ・VTR、絵葉書、写真、パンフレットを見たり、みやげ話を聞いたりして楽しむ。
	◎昼食代・バス代の支払い ・支払のときのやりとりについても練習	◎切符の買い方 ・駅で実施指導 ・料金表、時刻表などの見方 ・困った時の対処の仕方（駅の人に聞く。）	◎日程、見学地の確認 ・しっかりと話を聞く。 ・分からないことは質問したり確かめたりする。
	◎日程表作り ・出発から帰宅までの場所や時刻などを詳しく書くことにより、自分の行動を具体的にイメージする。	◎梅の実の収穫 ・梯子や木に登る。 ・高い所の実も取る。 ・収穫物をていねいに扱い、選別をする。 ・指示を正しく聞いて作業をする。	◎見学先の下調べ ・動物や見学する場所のことについて、分担して調べる。 ・協力して地図やしおりを作る。
	◎紙すきの練習 ・実際に体験することにより、当日の活動を楽しみにし、聞きたいことをまとめる。	◎地図作り（まとめ） ・コースやしたこと、見たことなど思い出地図作りをする。 ・友だちと話しながら思い出す。	◎あいさつとおみやげ ・あいさつ練習 ・おみやげ作り ※相手の気持ちになって
	◎校外学習当日 ・計画に従って、自分たちが中心になってまとまって動く。	◎梅シロップ、梅干し作り ・作業手順に従って、協力して作業をする。 ・できあがりを楽しみにする。	◎平和と戦争 ・平和と戦争について話し合い、友だちの考えを聞いたり自分の意見を言ったりする。
	◎新聞作り ・経験したことを新聞にまとめ、発表する。		◎まとめと反省 ・礼状、アルバム作り等
	◎報告会（全体のまとめと反省も含む） ・資料や作文、新聞などをもとに学級毎に発表したり質問に答えたりする。		

② 一人ひとりの思いを引き出し、仲間意識を育てようとした1年生の実践

「キャンプ」

a. 取り組みに対する基本的な考え

1年生の生徒は5名で、中学部では人数の少ない学級でもあり、おとなしい印象を与える。「キャンプ」は入学して初めて取り組む大きな単元であり、一人ひとりの思いを引き出したい、教師を仲立ちにして少しは友だちと関わらせたい、という願いを持って取り組んだ。学習を展開するにあたっては、分かりやすい発問や選択肢の準備等により5人全員の意見を吸い上げながら進めることに努めた。また、学級全体や2～3人の小グループで協力して活動させ、仲間意識を育てていった。

b. 実践の概要

活 動	内 容
1. 結団式	・上級生の話や写真等を手がかりにイメージを持つ。
2. 学習計画	・準備・練習しておくこと ・日程表作り
3. 学部遠足	・キャンプする場所を知る。
4. 準備・練習	・まき作り ・炊飯練習（カップラーメン、カレーライス、サラダ） ・テント張りの練習 ・食器作り ・Tシャツの模様の印刷 ・出し物練習 ・買い物（食事の材料）
5. キャンプ当日	・日程に従って準備・練習したことを発揮
6. まとめ	・学級、学部で反省 ・絵や作文

c. 展開の様子

出し物決定の学習では、事前に「帰りの会」を利用して取り入れたい歌を調べると、「セーラームーンの歌」とH子の「鳥の歌が好き」という意見が出た。しかし、「セーラームーンの歌」は、H子が嫌いで休憩時に流すと泣き出したため、候補にはあげないことにした。そこで、教師がまず候補として、H子の意見を生かした「翼をください」、学級で休



出し物練習の様子

憩時間によく聞いていた「オラは人気者」「オーレ・チャンプ」、キャンプの行事にふさわしい「キャンプだホイ」の4曲を示し、選ぶよう提案した。Y子がすぐに、「どうしてセーラームーンがないの」と訴えたがH子のことを話すと「分かった。テレビで見るからいい」と納得した。その後誰がどの曲を希望するか、一人ずつ聞き確認していった。その結果、H子とD男の2票を得た「キャンプだホイ」が、まず決定した。しかし、他の曲がよいU男は残念ながら、「もう1曲選ぼう」と主張したり勝手にあみだくじを作り始めたりして、話し合いが混乱してきた。そこで、教師が、曲を増やすかどうか、増やすとすればどの方法がよいか等をひとつずつ押さえながら公平に決定していった。

d. 実践を終えて

どの活動でも学級全員の意見を大切にすることや、友だちとの関わりを楽しむことを重視したことは、学級づくりをする上で大きな役割を果たした。

「校外学習（佐治村）」

a 取り組みに対する基本的な考え

6月のキャンプを終えて、5人ながらも集団で見通しを持ちながら学習していく形になれてきた。7月に実施したこの単元は学年独自の活動であり、様子がよくわからないながらも、自分たちの話し合いにより計画を立てた実践につなげたいと考えた。

b 実践の概要

活 動	内 容
1. 学習計画の話し合い	・パンフレットや写真を手がかりに、見学場所や内容を決める。
2. 昼食代・バス代の支払い	・持ち物について、持って行く理由を考える。
3. 日程表作り	・支払いの時のやり取りについても練習をする。
4. 紙すきの練習	・出発から帰宅までの場所や時刻などを詳しく書くことにより、自分の行動を具体的にイメージする。
5. 校外学習当日	・実際に体験する事により、当日の活動を楽しみにし、聞きたい事をまとめる。
6. 新聞作り	・計画に従って、自分たちがまとまって動く。
7. 報告会（全体のまとめ）	・経験した事をまとめ、発表する。
	・学級ごとに発表したり、質問に答えたりする。

c 展開の様子

学習計画の話し合いの中で、「持っていく物」について話し合っただけで決めようとした。必ず持っていく物については指導者が提示したので、「学習に必要な物は何か」と問いかけた。発言の中に持ち物とその理由を入れることで、聞く者はその意見に納得したり、また、つけ加えをしたりすることができた。

ノート・筆箱……思い出を忘れないようにノートに書く。U男の意見（記録しておくこと）
時計……時間が分かる。D男の意見（時間を知ること）
お金……昼食代、バス代。Y子の意見
帽子……あつい。H子の意見（暑いので帽子がいる）
手作りはがき……見てもらう。Y子の意見（自分達のはがきを見て気づいたことを教えてもらう）
次に、当日の服装についてU男が質問をしたので、みんなの意見を聞いてみることにした。
U男；普通の服です。D男；制服です。U男；制服はおかしい。D男；制服を着てくる。U男；学校から行くから制服はいけん。D男；制服を着てくる。
この2人の意見の応酬は平行線のままで、だんだんいらいらしてどなってくるU男と同じ言い方を繰り返すD男。そこで、まず、U男に理由を話すように進めた。U男は、「佐治に行くから」「キャンプのように汚れるから」と言った。D男は言えなかった。推察ではたぶん自宅から出るときには制服を着るのが良いと思っていたのであろう。それらしきことを助言しておいた。では、他の子はどのような意見だったか。結局、普通の服に賛成したので、U男の意見が通った。

d 実践を終えて

以上のようなことから、U男は理由を言うことで友だちを納得させることが分かってきた。がむしやりに自分を押し通そうとする傾向にあったU男は、この辺りから徐々にクラスの中心的存在になってきた。当日の佐治村校外学習では、まだまだ自己中心的な言動・行動をしながらも少しずつ友だちへの気づかいを見せるようになった。

③ 生徒同士のつながりをできるだけ大切にし、自主性を育てようとした2年生の実践

〔キャンプ〕

a 取り組みに対する基本的な考え

中学部2年は、昨年度1年間の学習・生活を通してそれなりのまとまりができたと考えられる。しかし、生徒間のつながりをよく観察してみると、けっして強いものではない。自分の思いや見通しがあって、自分なりに活動を進めるM男・S男。指示があると活動に参加することができるが、自らの思いを表出することの少ないG男・A男。友だちと一緒に活動を楽しむことを目標としているL男。この学習を通して、このような生徒を「同じ学級の生徒」から「ともに共通の目的をもつ仲間」へ育てたいと考えた。また、M男とS男をリーダーとしてそれぞれ活動させたいという意図をもって取り組んだ。

b 実践の概要

学校を離れてのキャンプである。事前に話し合い活動を繰り返し、個人の役割・個人の目標の決定を始め、全体の学習計画を立てた。しかし、なんといってもテント設営と食事の準備が活動の中心になる。



テント設営に挑戦するM男たち

特にテント設営では、M男とS男のリーダー養成というねらいから、7名の生徒をM男中心のグループとS男中心のグループとにわけて設営を競わせることにした。M男・H男・G男・L男のグループとS男・N男・A男のグループでそれぞれに苦労を重ねながら、テント設営に挑戦していった。(単元全体の流れは75頁を参照。また、昨年度の様子については、本校研究紀要第14集77頁参照)

c 展開の様子 (M男グループの様子を記す)

テント設営をしながら、楽しんで豊かに人と関わる姿

	第1回 (5月23日)	第2回 (5月31日)	第3回 (6月3日)
関わりの様子	テント設営作業から逃避しようとするL男に振り回される。G男とH男は手順の図を何度もみるが、1人で作業をしようとするので、作業がばらばらになる。リーダーになったばかりのM男も3人に働きかけや声かけができない。	「L男に何か役割を与えては」という教師の助言を受けて、M男はL男にボールを持たせることにした。(教師に促されて) H男とG男は、M男に「M君、これはどうする?」と尋ね始める。「うん、それは……」と答えるM男。	「L君、しっかり持って」「H君は、こっち」「G君は、そっち」徐々に声が出始めたM男。M男の指示に対して「ハイ!」と元気よく返事をして作業をするG男。わからなくなると「どうする?」と尋ねるようになったH男。
教師の役割	4名の教師がテント設営を行い、モデルとして示す。また、手順の図を準備し、掲示する。	指示が出ないM男にH男とG男から働きかけのきっかけを与える。答えざるをえない状況を設定する。	できるだけ生徒の活動を見守り、援助を控える。生徒で解決する場面を作るように心がける。

d 実践を終えて

テント設営の練習のたびに「つかれた」とつぶやいていたM男が、教師に励まされながら、「次回こそ上達しよう」と決意していた。教師の待つ姿勢が、徐々に生徒の自主性を育てたように思う。これをさらに高めたい。

「校外学習」～福部村周辺〈梅取り作業と砂丘を楽しむ〉～

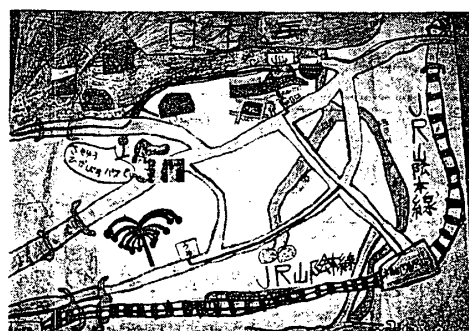
a 取り組みに対する基本的な考え

2年生は、学級の仲間意識を高めたキャンプの取り組みを勢いにして、7名がまとまって活動できるようになってきた。生徒たちのコミュニケーションを重視して、できるだけ指導者のリードを控えて自主的に活動させたい。そこで、「みんなといっしょに行動し、困ったら声を掛け合って助け合う」姿勢を大切にしながら、最後まで活動しきることをめざして、学習を進めることにした。

b 実践の概要

前単元が終わる頃に梅の収穫期が当たり、事前学習や下見をする間もなく当日を迎えざるを得なかった。日程表や観光マップを確認し、とにかく出掛けて「見よう」「働こう」「楽しもう」そして、事後学習でまとめようということになった。梅については、昨年度「梅シロップ」を作ってみんなに飲んでもらい、喜ばれた経験があるので、今年は自分たちで取った梅で作ろうと意欲満々であった。

- | | |
|---|----------------------|
| 1 | 日程・集合場所・活動内容・コースの確認 |
| 2 | 校外学習当日 |
| | ・切符の買い方（JR） |
| | ・梅の実の収穫作業 |
| | ・砂丘温泉ふれあい会館（4km徒歩） |
| | ・鳥取砂丘（レストラン・展望台・リフト） |
| 3 | 梅シロップ・梅干し作り |
| 4 | 地図作り |
| 5 | 報告会（学部全体） |



c 展開の様子

梅取り作業では、身軽に木に登って作業するS男。それを真似て追いかけるように低い木に登ったH男。「高い梯子を貸してください」と頼んだM男。脚立にうまくまたがれず恐る恐る作業をしていたが、ついに脚立に立ち上がって梅を取ったA男。A男に対抗したが恐くて登れず、脚立に足をかけて木にしがみつき、低い所の梅を取ったN男。木も梯子も登るのが恐くて、背が高いことを利用して下から手の届く限りの梅を取ったG男。友だちの落とす梅を拾ったり、折ってもらった枝から1つひとつ実を取ったりしたL男。それぞれが自分なりの方法を工夫したり、「持っという」「落とすで」「そこ！そこ！あそこにあるが」など声を掛け合ったりしながら作業をした。選別しながら「ようけ取ったな」「せっかく取ったのに……腐っとる」などのつぶやきも満足気だった。その後、らっきょう畑を歩いて温泉に行ったことや砂丘でリフトに乗ったことなどの思い出も含めて、自作の地図にまとめ、学部全体の報告会で校外学習の報告をした。

d 実践を終えて

事前に観光マップでコースを確認したことや、活動に見通しの持てるS男、M男、N男のリードで生徒が自主的に活動できた。仕事の分担を工夫したり、遅れがちになる友だちを気づかたりする言動も見られた。指導者が前面に出ないで、明確に見通しの持てる活動内容を設定することにより、生徒の活動も自主的になり、集団の中で素直で自然なコミュニケーションが生まれると思った。

④ 自主的な話し合いやイメージを行動化することで、ことばの意味を実感した3年生の実践

「キャンプ」

a 取り組みに対する基本的な考え方

3年生9名は、発達段階は2歳半～9歳と開きがあり個性も豊かであるが、集団活動では助け合う態度が芽生えている。キャンプは過去2回の経験があり、活動に見通しが持て、経験をもとに計画を立てたり活動に工夫を加えたりする力も大半の生徒に育っている。コミュニケーション意欲も高く、個々の意思表示や自己主張が活発である。しかし、人の話を聞き入れて考え、それを行動化する面で弱さがある。ことばの意味を知らずに発言したり、発言したことばが行動に移せなかったりもする。

そこで、生徒の話し合い活動を多く取り入れることにより、お互いの意見をよく聞き合い思考をくぐらせたことばを育てたいと考えた。また、単なることばのやりとりだけではなく、ことばの行動化を通して、ことばの持つ意味を実感させ、行動に裏打ちされたコミュニケーションを図りたいと考えた。

b 実践の概要

活 動	内 容
1. 計画会	・目標（クラス・個人） ・準備や練習する事 ・日程
2. 野外炊飯	・かまど作り ・まき作り ・チャーハン作り ・役割分担
3. テント張り	・テント張りの方法理解と、テント張り
4. キャンプ準備	・必要品の準備・荷造り ・持ち物分担
5. キャンプ	・日程に沿って、実施
6. 反省会	・感想・反省 ・作文

c 展開の様子

キャンプの目標の話し合いの結果、「仲よく協力して、苦勞したかいのある楽しいキャンプにしよう」と決まり、以後の活動を通して、このことばの持つ意味がどういうことかを体験していくことになった。役割分担では、みんなの希望がひとつの係に集中した。かなりの口論の末、泣きながら自己主張に修正を加える経験をした。まき作りではまきを支える人と切る人、かまど作りでもオイル缶を支える人と切る人の協調を必要とした。テントは1人では決して張れず、9人の協力が必要だった。けんかあり投げ出しありで、最初2時間近くかかっていたテント張りは、苦勞の連続であった。テントが張れないと寝る所がない。苦勞しながら数回練習した末、当日は40分で張ることができた。「かまどとテントは、みんなで持つ」と話し合い、重いのをがまんして順番に交替しながら3.6kmの道のかつぎ歩いた。まさに、仲良く協力して、苦勞したかいのある楽しいキャンプを実践した。

d 実践を終えて

生徒は、話し合いにより友だちの意見を聞いて考え、実行によりその意味を体験した。一方で、生徒の話し合いや自主的な実行力を育てる教師の側は、出すぎにはならず、しかも適切な援助は加えねばならずで、生徒の自主的な活動のための「待ち」と「見守り」そして「援助」のタイミングへの十分な配慮が必要であった。

「修学旅行」

a 取り組みに対する基本的な考え方

「キャンプ」は過去の経験を土台に発展させることができたが、「修学旅行」は未経験の単元であり、未知の体験をイメージとしてふくらませることが土台になる活動である。そして、イメージをいかに豊かにふくらませるかが、実体験の感動を左右する。

生徒9名は、修学旅行への関心や意欲が高く、個々の発達段階に応じてそのイメージを展開できると考える。

キャンプに引き続き、生徒の自主的な活動を通して主体的に個々のイメージをつくり、そのイメージを体験していくことにより、イメージや実体験に裏打ちされたコミュニケーションの向上を図りたい。

b 実践の概要

活 動	内 容
1. 結団式	・日程と見学先 ・VTR ・日程表作り
2. 乗り物や見学先調べ	・地図作り ・新幹線 ・原爆 ・動物園 ・水族館 ・宮島など
3. 千羽鶴のねがい	・メッセージ ・千羽鶴の糸通し ・荷作り
4. しおり作成	・目標・きまり・日程・持ち物・見学先について調べたことなど
5. 修学旅行	・当日の日程に沿って実施
6. 反省	・作文 ・絵 ・アルバム整理

c 展開の様子

授業では、いかに主体的に豊かなイメージをつくるかがキーワードとなる。そこで五感を十分使う授業を組み立てた。結団式では、下見のVTR・絵はがき・パンフレット・みやげのしゃもじ・もみじまんじゅう・みやげ話（視覚・聴覚・触覚・味覚）を使った。自分の調べたい見学先を分担し、写真・絵はがき・パンフレット・本・新聞・電話といった情報をもとに調べ、発表し合った。原爆については、絵本「とびうお坊やは病気で」（水爆実験がテーマ）を読み聞かせた。千羽鶴が焼けたという新聞記事をもとに千羽鶴の意味や願いを学習し、自らの手で丹念に鶴に糸を通し（触覚）、「病気が治りますように」「みんな平和でありますように」といった思いをメッセージとして添えた。



重度の生徒では、「新幹線のる。ゾウ見る」といったイメージが育ち、中・軽度の生徒には、戦争とか千羽鶴の意味といった抽象的イメージが芽ばえた。

d 実践を終えて

五感を使い、主体的に調べて教え合う活動は、イメージづくりにおいても、意欲を向上させる面でも有効であった。自分で調べイメージしたことが、旅行で体験できた時の喜びを、どの生徒も持つことができた。旅行後も思い出話が尽きず、広島ニュースに耳を傾け報告する生徒もみられた。この実践で、イメージをつくっていくことがコミュニケーションを拡げ豊かにしていくことを実感した。

(3) 「大山宿泊学習」における実践

① 取り組みの構想

本単元では、主に学級を中心に活動してきた1学期の学習を経て、学級を解いた縦割り班での活動を計画した。この班は、体育の学習での赤、黄、緑のグループと同じメンバーにすることを話し合っており、リーダーとなる生徒や人間関係も考慮した編成となっている。そして、大山宿泊学習当日の大山寺周辺の行動をすべて班活動とし、コースや活動内容等各班に任せることで、それぞれの班が特徴を發揮しながら自主的に取り組めるようにした。その中で、3年生のリーダー性を育てることと、学年を越えた人間関係の拡がりをめざした。また、観光客や見学先の人等、たくさんの校外の人との関わりが持てるよい機会だと考えた。

集 団	赤 班	黄 班	緑 班
コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ン を 意 識 し た 主 な 活 動 内 容	◎計画の話し合い ・班長、副班長 ・班の名前 ・目標 ・係り分担 ・したい学習内容	◎話し合い ・班の名前 目標 ・係りの仕事 個人のめあて ・班活動の内容 ・学習予定表	◎話し合い ・班の名前 係り ・班の目標 ・個人のめあて ・学習の計画
	◎大山までの地図作り (鳥取県) ・主な市町村や河川 ・主な特産物 ※自分達で調べて知る。	◎地図作り(大山周辺) ・見学場所の確認 ・見学場所の下調べ ・班活動のコース決定 ・学習内容やコースの把握 などのために、大きな地図を自分たちで作る。 書き込み、下調べの資料・絵などを自由に貼ってみんなで作る。	◎班の日程表作り ・活動の内容 ・昼食の決定 ・あいさつ係りとプレゼント係り 日程表を作りながら、決定したことを組み込んでいく。(計画と確認)
	◎スケジュール作り ・大山周辺で行ってみたい場所、してみたいことを 昨年の活動を思い出して話し合う。 ・1年生は2、3年生の話を聞いたり質問したりする。	◎出し物練習 ・係りの生徒が中心になって進行する。 ・内容を話し合って決める。 ・練習や準備をする。	◎出し物練習 ・内容についての話し合い ・出し物に必要な品物の準備 ・練習 ・テーマソング 係りの生徒が中心になって進める。
	◎出し物練習 ・内容、役割分担を話し合う～係りの生徒が中心になって～ ・練習	◎あいさつとおみやげ ・あいさつの練習 ・おみやげの準備 (作業学習の手作りの作品を使いたい)	◎しおりの書き込みと確認
	◎おみやげの買い物と レストランの利用 ・どんなおみやげを誰に買うのか。 ・昼食は何が食べたいか。 (メニューから選ぶ) ※家庭との連携	◎お金の使い方 ・おみやげの買い物 ～誰に何をかうか～ ・1000円以内の食事を注文	◎地図作り ・まとめと反省 ・見学場所を思い出して ・感想(作文) ・思い出を絵に描く。 友だちと一緒に、資料を見ながら思い出す。
	◎報告会(全体のまとめと反省も含む) ・資料や作文、新聞などをもとにして班活動を中心に、発表したり質問に答えたりする。		

② 相手の立場にたつてつきあう態度や、相手を受け入れる寛容さが芽ばえた赤班の実践

a 取り組みに対する基本的な考え方

1年生2名、2年生2名、3年生4名から成り、クラスを離れたメンバーによる集団で展開される単元である。発達段階は2歳半から10歳と開きがある。大半の生徒は自分の意思表示や意見発表ができ、重度の生徒も選択肢から選ぶことで意思表示が可能である。7名中4名はクラスの学級委員長の経験があり、自己主張が活発でリーダー性を持っている反面、自己中心性が強い面もみられる。

このような実態を配慮して、大山宿泊学習に向けての計画・準備をできる限り生徒たちの自主性にまかせて進めていくことにより意欲を盛り上げながら、相手の立場にたつてつきあう態度や、相手を受け入れる寛容さを育てたいと考えた。

そのために、一人ひとりが意思表示や意見を述べる機会を多く持ち、お互いに聞き合い考え合う話し合い活動を十分にさせ、これに基づいて行動させる方針を取った。教師はあまり前面に出ず、リーダーを中心に話し合わせ、教師もメンバーの一員として発言することで指導に入るようにした。

b 実践の概要

活 動	内 容
1. 結団式	・日程 ・見学先 ・班学習で話し合う内容について
2. 計画会	・班の名前・目標 ・班長・副班長・係り分担 ・学習内容と日程
3. 大山までの地理	・地図製作(国道・鉄道・山・川・海・市町村・見学先・特産物)
4. 班行動のスケジュール	・大山寺周辺の地図 ・行き先・見学先 ・見学の順序
5. 出し物練習(夕べのつどい)	・出し物の内容と方法 ・練習
6. 大山宿泊	・日程に沿って実施
7. 反省会	・目標についての反省 ・みやげ話 ・お礼状 ・絵と作文

c 展開の様子

「3年生M子をリーダーに、生徒自身の話し合いと行動によってつくる大山宿泊を」とねらってスタートした班活動であったが、最初の話し合いから口論やけんかが始まり、以後大山宿泊学習が終わるまで度々トラブルがあった。他班から、「赤とんぼ班は、いつもけんかしたるなあ」と言われるほどであった。自己主張が強く、セルフコントロールの未熟な生徒がたまたま集まった感じのする赤とんぼ班だが、活動への興味・関心は高く、意欲は十分にあったしその実力も持っていた。この意欲の強さが自己主張の強さやセルフコントロールの弱さを助長させ「けんか」を生んだが、このことを通して相手の立場にたつて考え、相手を受け入れることの大切さに自ら気付いて、気持ちを立ち直らせ、それをことばや行動で表現することが少しずつできた。教師は、生徒自身の気づきと自己統制を重視したいために、教師側の価値観は最終段階で生徒に問いかけるように提示し、生徒自身に考えさせるよう心掛けたが、「待ち」と「助言」のタイミングに難しさを感じた。以下、実践例を述べる。

〈誰もがなりたい班長・副班長。なれなかったら書記を作ってしまう〉

班長・副班長は、学級委員長経験者4名は皆やってみたい役であった。立候補→推薦→多数決というルールを経て、班長には「班をまとめる。みんなをかわいがる」と発言したM子が決まり、副班長

には推薦されてS男が決まった。気持ちの収まらないのがN男とU男であった。U男がついに、「書記を作ろう。書記は班長・副班長を助ける役」と意見を述べ、結局予定になく他のどこの班にもない「書記」が誕生することになった。書記にはN男とU男が納まり、2人の興奮も治まった。

〈ルールを受け入れ、がまんできたことに大きな拍手〉

生活係・食事係・清掃係・レクリエーション係の担当を決めることになった。自分の希望する係を発表し合ったところ、食事係に5名が集中した。しかし、食事係は各班2名ずつと決まっている。しばらくの間、お互いを代わらそうと問答していたが、誰も譲らない。仕方なくジャンケンで決めることになりジャンケンをしたが、そ



の結果にU男が従えず食事係を主張し続けた。M子がルールの念押しを何度もした後、時間はかかったが気持ちを立ち直らせたU男は、泣き顔寸前で「生活係をする」と宣言できた。U男を説得して生活係にさせたM子であったが、次に自分が清掃係になる立場に立つと、「イヤだ。私は食事係」と言い張る。さっき涙をのんで生活係を受けたU男が、「勝手なことをすると班長なしにするよ。清掃係をする」と発言した。他もこれに賛成し、「M子さん、清掃」コールが始まったが、M子は拒否を続けた。ここで教師がルールの念押しにはいった。かなりの時間を要した末、M子もついに気持ちを立ち直らせ、清掃係の欄に自分の名札を置くことができた。気持ちを立ち直らせた2人に大きな拍手が送られた。

〈その他、いろいろ〉班の名前決めでは、「赤とんぼ」「あかとんぼ」「赤トンボ」どう書くのかでかなりもめた。意見の対立する友だちに向かい「出て行け」と発言したU男に対し、M子が「それは心が傷つく。あやまりんさい」と怒り出した。大山宿泊当日、生徒用として与えられたカメラを誰もが持ちたくて、誰が持つかをめぐるトラブルもあった。

d 実践を終えて

生徒の話し合い活動に重点を置いたことが自己主張のぶつかり合いを生むことになったが、これは決してマイナス評価ではなく、相手の立場になってつきあう態度や相手を受け入れる寛容さを身につけるための1つの過程であるにとらえたい。このようなプラス評価につなげるには、ひとつにルール理解とルールを受け入れる態度を身につける必要がある。また、感情や欲求をコントロールする力も必要である。そして、相手にとっても自分にとっても望ましい関係を形成していくことが重要である。

「仲がええけ、けんかするだが」と友だちに励まされ気を立て直し、自分自身も自己中心性をのぞかせながらも最後まで班長の自覚を持ち、みんなを気遣ったM子。そのM子が、反省会の席で他班の生徒から「赤とんぼ班は、なぜけんかをするのですか」と聞かれた時、「それは、みんなの意見がちがうからです」と答えた。このことばの中に、相手の立場を受け入れようとする芽ばえが感じられた。

この実践を通して、相手の立場に立ち相手を受け入れようとする態度を身につけることは、豊かなコミュニケーションへの一歩であることを感じた。

③ 友だちのことを考えて、「みんながいっしょに行動しよう」と仲間意識を育てた黄班の実践

a 取り組みに対する基本的な考え

黄班は、中3 E男、F男、Z男、R子、中2 G男、H男、中1 K男の7名である。自閉的傾向の生徒が4名いる。K男は集団行動が取りにくく、場を離れることが多い。F男は、学習に参加するためには、常にまわりの援助を必要とする。「みんながいっしょにしよう。いっしょに行動しよう」というめあてを持ち、班の中で、K男とF男の存在を意識する仲間作り、場面設定を工夫することにした。

世話好きでよく気がつく班長R子と、指示理解ができて見通しの持てる副班長E男を中心にして、班を2つのグループに分けて活動するようにした。R子、H男、K男（担任）のR子グループと、E男、Z男、F男、G男のE男グループである。「K男がいない」「呼んでこんと」など、友だちの存在を確かめてから活動を始めるようにした。

b 実践の概要

「〇〇君には、これがいいかもしれんし……」と友だちのことを考えて思い迷うR子。多数決や思いつきで安易に決めてしまおうとするE男。友だちの意見を聞いては気持ちが揺れ動き、つぶやきの多いZ男。うながされないと意見の言えないG男とH男。選択肢の中から自分なりの意思表示をするF男とK男。黄班の話し合いは、みんなの気持ちがはっきりしないまま、E男の勢いで決定してしまう傾向にあった。時間をかけて、一人ひとりの思いを確かめてお互いに理解し合う必要性を感じた。

そこで、まず自分の思いや理由が言えるようにR子グループとE男グループに分かれて話し合い、それから全体で話し合うようにした。作業や係分担も、この形で行った。そうすることで、つぶやきや小さな思いも大切にすることができるとともに、自分の意見や態度には責任を持つ、という自覚をうながすことができた。

c 展開の様子

友だちのことを考えながら自分の思いを言うことができた「見学場所を決める」と「コースを決める」学習について、述べてみる。

〈見学場所を決める〉

- 〔見学したい場所とその理由〕(番号は多かった順)
- ①おみやげの買い物～
「家の人が喜ぶから」「買い物がしたい」
(E男、R子、H男、G男、F男)
 - ②大山寺～「大山寺に来たから」
(寺の名前と地名を混同)
 - ③大神山神社～「中を見たことがないから」(E男)
 - ④さいの河原～「石を拾いたい」
 - ⑤大山自然科学館～「行ってみたい」(K男)
 - ⑥阿弥陀堂～「行ったことがないから」(Z男)

教師の働きかけ・応答	生徒の反応・苦悶の様子
(学習したいことを話し合う場面で)	E男：お土産の練習をします。 H男：お土産を買う練習です。
E男君は違う意味ですか。	E男：はいそうです。 E男：はい お土産の練習
それはお土産を買う練習ですか。	E男：違います。
どうしようにするの？	E男：……………
H男君とは違うんですか。	E男：はい
H男君が言ったお土産は、墓にあげるお土産ですか。	H男：お兄さん
E男君は？	E男：父、母、兄、弟……………
買う練習ではないんですか。	E男：はい
どちらが合っているの？	E男：……………
和傘伝承館に持って行くお土産のことですか。	E男：履す練習です。お土産を履します。
よく分かるように言ってみよう。	E男：和傘伝承館でお土産を履す練習です。
H君は1,500円で上手にお土産を買う練習のようですが、E男君のはお土産を履す練習のことですね。	

～やりとりにより、自分の考えを確かなものにしたE男～

⑤と⑥は希望者が1人しかなく、行かない方向に話し合いが進みつつあった。しかし、大山自然科学館を希望したK男に対して、R子が「私やあは去年行ったけど、K男は初めてだから今年も行くことにしてはどうか」と言い出した。H男も「K男に見せてあげよう」と賛成した。また、阿弥陀堂もZ男だけが希望していた。「遠いし」(E男)と反対の声があがった。しかし、Z男が「どうしても行きたい」と主張し始めた。「では、1人で行って来たら」(R子)という、「1人はいやだ。みんなといっしょに行きたい」(Z男)Z男の気持ちが強いこと、「みんなといっしょに行動しよう」という班のめあてもあることにより、どうするかという話し合いになった。「①～⑥まで6か所も見学する時間があるだろうか」「阿弥陀堂は遠い」という不安はあったが、「みんながいっしょに」ということで、阿弥陀堂にも行くことに決まった。

〈コースの決定〉

2つのグループに分かれ、6か所を見学するコースを考えた。お互いに考えたコースを照らし合わせながら、理由を言うことができた。4番目にどこに行くかで、2つのグループの意見が対立した。「遠いから先に行ってしまうおう」と言うE男グループ。「3番目の大山寺から近い大山自然科学館に先に行こう」と言うR子グループ。結局、「K男に早く見せてあげたい」というR子の意見に、E男グループ



～地図作り～

が簡単に「じゃあ、いいで」と引き下がった。最終的に決定したコースを地図上で確かめると、行ったり来たりする複雑なものになってしまった。自分たちの思いを言って決めたことには満足していたが、実際には、このコースでは大変だという不安が残った。その後、教師の助言により、みんなでいっしょにコースを変更した。「たとえば、この道を行けば……」とか、「帰りに荷物を持たなくてよい」などの説明に、「なるほど」「本当だ」などとつぶやいて、コースの変更に納得していた。



～大山寺にて～

d 実践を終えて

話し合いの場面に参加しにくいK男とF男も、分担された作業には集中して取り組んだ。一人ひとりが自分なりの思いを伝えて決めた見学コースは、どの生徒の頭にもはっきりと入っており、当日の班活動を生き生きとしたものにした。「次は、〇〇だで」「時間がなくなるぞ、急ごう」「△△君は?」「おるで」など、めあてを意識しながら見通しを持って行動できた。体力的に不安のあったZ男も、自分の意見で決定した阿弥陀堂に元気よくたどり着いた。遅れがちになる友だちを気遣いながら、つかず離れずという状態でいっしょに行動した黄班は、計画したコースを余裕をもって回ることができ、全員満足の笑顔であった。

④ 劇的体験によって、仲間意識を高めた緑班の実践

a 取り組みに対する基本的な考え

緑班は、大山宿泊学習を経験しているL男・M男・A男・O男・I男の5名と、経験のない1年生D男・Y子の7名である。全員話し言葉があり、ひらがな文字を読む力がある。しかし、班別による学習で、話題の内容がわかり、なんとか内容にそって自分の思いを話せる生徒はI男・M男。選択肢を準備したり、教師が発言を言い換えたりすることによって、なんとか意思表示が可能な生徒がO男・A男。Y子は1年生ではあるが、話し合いを意識させれば自分なりの思いをもって参加することができる。L男・D男については、緑班の一員であることを意識させ、ともに活動しながらそれなりの楽しさを経験させることをねらっている。大山宿泊学習を通して、緑班では次のような視点でコミュニケーションの拡がりを求めていった。

- ・多様な生徒によって構成されている「集団」を、ともに楽しさを共感したり、対立する意見を話し合いによって1つの意見へまとめたりする「仲間」へ高めたい。
- ・昨年も班長を経験したI男をリーダーとして学習を進めるが、はっきり意思表示ができる2年生M男をサブリーダーとし、M男の良さを集団へ浸透させる場面を設定したい。(I男の活動については本校研究紀要第14集80.81.82頁参照)

b 実践の概要

昨年と比べ事前学習の時間が短いため「大山寺周辺で展開する班別活動の計画立案」と「宿舎でのタペのつどいで行う出し物練習」の2つに絞って、事前の学習を進めることにした。

班別活動の企画段階では、昨年の経験をいかし2年生と3年生が話し合いを進めていった。昨年の活動を振り返って

人気の高い順に活動内容・活動場所を決定し、最終的には、緑班独自に6つの活動をするようになった。但し、班別活動として割り当てられた4時間では遂行しきれず、途中止めになる場合もあることを覚悟した上での企画になった。当日の様子については、展開の様子で記す。

c 展開の様子

学習初期の段階では発言する生徒が限られていた。また、1年生は常に選択肢を準備しなければ学習そのものに対する興味・関心が持続しないといった状況であったが、徐々に生徒間のやりとりがうまれるようになった。特に活発なやりとりが展開されたのが〈出し物の計画〉〈大山寺周辺班別活動〉である。

大山寺周辺の班別活動計画

①元谷から夏山登山道を迂回しての下山
②夏山登山道1合目にある阿弥陀堂参拝
③阿弥陀堂から南光河原へ移動
④土産物店でのアイスクリーム (これは教育実習生から得たアイデア)
⑤豪円山への登山
⑥大山自然科学館見学

〈出し物の計画をする段階での、豊かに人と関わる姿〉

I男：出し物には「セーラー・ムーン」の歌と「新婚さん、いっらしゃい」ゲームの2つがで	(Y子を除く6人はゲームに賛成していたが、Y子は納得していなかった)
--	------------------------------------

ていますが、どうですか。	→ Y子：セーラー・ムーンの歌がいいです。
I男：ようちっばい！	→ Y子：セーラー・ムーンの歌がいい。
O男：中学部1年のお楽しみ会にしんさい。	→ Y子：セーラー・ムーンの歌がいい。
M男：来年の大山宿泊学習のときにしんさい。	→ Y子：歌がいい。
A男：（教師に促されて）あきらめんさい。	→ Y子：歌がいい！
I男：みんなが新婚さんゲームがいい！といて いるのだから、Y子さんはあきらめんさい。	↙ Y子：エ～ン、エ～ン……

結局、教師のアドバイスでY子の主張する歌は、大山に向かうバスの車内でみんなと歌うことを班長I男が、他の班長の了解を得ることでY子が納得し、出し物にはゲームをすることになった。Y子は準備の段階では、張り切って画用紙に歌詞を書き込んでいた。

〈大山寺周辺での班別活動の様子〉

元谷から夏山登山道を迂回して大山寺までの下山。ここまでの登山道からみてもこれ以上困難な場面が予想される。しかし、困難な場面に遭遇することで、7名の集団に仲間意識が育つのではないかと考え、挑戦することにした。険しい山道を休憩しながら必死に登る。登りながら「がんばれよ」・「もう少しだぞ」・「下りてからのアイスがおいしいぞ」とお互い声をかけ、励まし合った。途中で標高1200Mという標柱をみつけ「高い所へきたな」と話すI男。登山道崩壊防止ネットでは「I君、だいじょうぶか」と声をかけるO男。「まだかな」・「えらいな」と繰り返すY子やL男。やっとのことで、夏山登山道との合流点に着いた。

しかし、緑班のドラマは下りにあった。下りは登りの道より荒れていて、視野が狭く転びながら下る班長I男への配慮として、副班長M男に先頭を交替させた。M男は、より安全で下りやすい道を選んで「こっち」「あっち」と指示する。みんなのペースに遅れがちなL男を心配して、「L君を待とう」「O君、前にでたらいいけん」と力強い声かけをする。下りになって辛くなったY子は、I男のがんばっている姿をみて「こわい、こわい」と繰り返しながらも1人で下っていった。教室では自分勝手な発言をしたり行動をしたりすることのあるO男や、集団に参加する意識の少ないA男も、M男とI男を中心にしっかり団結していた。



夏山登山道の下りにて

d 実践を終えて

「歌が歌いたい」Y子を説得しようとした生徒たち。拒否するのではなく、Y子の願いも大切にする生徒たち。登山では、ペースの違うみんなが1つにまとまった生徒たち。大山寺まで下って、他の班と出会ったときの喜びは最高ではなかったか。予想を越えるドラマチックな経験をし、仲間意識・チームワークが育ったと感じる。